研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-110	A-133	17-079	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

No effects of increased alcohol availability during adolescence on alcohol-related morbidity and mortality during four decades: a natural experiment.

青年期のアルコール使用率の増加はアルコール依存症の罹患率と死亡率に影響しない：自然実験

執筆者

Thern E, Jia T, Willmer M, de Munter J, Norström T, Ramstedt M, et al.

掲載誌

J Epidemiol Community Health. 2017 Nov;71(11):1072-1077. doi: 10.1136/jech-2017-209164.

キーワード	PMID
スウェーデン、青少年、アルコール政策、アルコール関連罹患率、アルコール関連死亡率、自然実験	28923835

要　旨

背景：
アルコール購入の法的な年齢制限が厳格なほど青少年のアルコールへのアクセスが減少するが、長期的な健康への影響はほとんど知られていない。

目的：
アルコール関連の罹患率および死亡率に対するアルコールの購入の法的年齢制限を低下させるという長期的影響を明らかにすることである。

方法：
スウェーデンの 2 つの地域では、1967 年/ 1968 年に 16 歳以上（21 歳ではなく）の個人用の食料雑貨店で強いビール（4.5～5.6%アルコール）が一時的に購入できる政策がとられた。介入群は、介入領域に 14-20 歳の時に住むすべての個人（n = 72 110）と定義された。国境郡を除く残りのスウェーデン郡は、政策変更なしで対照群として使用した（n = 456,224）。アルコール関連の罹患率および死亡率の結果は、病院退院登録簿および死亡原因記録簿から収集され、平均経過観察期間はそれぞれ 38 年および 41 年であった。Cox 回帰分析により、95%CI の HR を得た。

結果：
対照群と比較して、介入群ではアルコール関連診断の入院患者ケアを受けるリスクが高かった（HR：1.09，95%CI 1.05～1.13）。個人および家族レベルの共変量、地域の人口密度を調整した多変量調整モデルではリスク比は 0.98（95%CI 0.95～1.02）と低下した。同様に、アルコール関連死亡率は介入群でリスク比 1.15（95%CI 1.07-1.24 ）であった。多変量調整モデルでは、リスク比は 1.02（95%CI：0.95～1.10）に減少した。

結論：
アルコールのアクセス増加に曝された青少年は、暴露されていない者と比較してアルコール関連罹患率および死亡率の粗解析ではリスク上昇が認められたが、地域集団密度がモデルに含まれていなくなったときに消失した。